

多文化間アドバイジング・カウンセリングの継続と変化 ～コロナ禍2年目の国際学生支援～

グローバル・エンゲージメントセンター

旧 国際教育交流センター

田中 京子・高木 ひとみ・酒井 崇・和田 尚子

1. はじめに

2021年度は、新型コロナウイルス感染の世界的拡大が収まらず、地域社会・国際社会の負担が大きい状況が続いた。国際教育交流においても、国際移動の難しさから、外国人留学生の渡日や一時帰国ができなかったり、日本から海外への留学ができなかったり、または国際移動が一時的にできたとしても、知人もいない環境の中で隔離されて健康観察をするなど、困難を強いられる一年であった。特に海外から日本への渡航が非常に難しく、一度緩和された水際対策が1か月経たないうちに制限されるなど、渡日予定の留学生たちは準備の目途が立たないまま、長い人は2年間、待機を余儀なくされた。

そして、コロナ禍に輪をかけて負担を強いることになったのが、世界各地での紛争や戦争であった。アフガニスタンやミャンマーでの武力による政権交代や、ウクライナにおける武力侵略の問題は、本学の学生や修了生たちにも大きな影響を与えた。

アドバイジング部門では、コロナ禍に関わらず心身の不調を訴えたり事故や事件に合ったりした学生たちの日々の相談に対応しながら、コロナ禍によって、状況の改善や解決がより困難になるケースを多く経験し、また紛争や戦争の影響を受ける学生たちとも接してきた。

感染対策を万全にして対面活動を行ったり、2020年度に集中的に整備したオンライン環境を利用したりしながら、相談対応や、学生たちとの協働作業、共修活動、また部門内でのコミュニケーションを行った。

2019年度から兼務するようになった学生支援センターは2020年度に「学生支援本部」として改組され、アドバイジング部門は「共修推進部門」として教員4名が兼務した。留学生を取り巻く環境やその課題、相談の傾向などについて引き続き情報共有ができるよう努めた。

2. 教育活動

(1) オリエンテーション：情報提供、信頼関係・交流・多文化理解の促進

留学生の渡日前から修了にいたるまでの参加型、交流型、日本語・英語併用オリエンテーションを、主にオンラインで行った。

【到着後オリエンテーション】

• 全学新入留学生オリエンテーション

2020年2月頃からの新型コロナウイルス感染拡大により、2021年度も春学期・秋学期ともオリエンテーションはオンラインのオンデマンド形式で行われた。アドバイジング部門では文化適応についてのナレーション付きスライドおよび、部門の関係資料を作成して掲載した。

• 宿舎オリエンテーション

留学生の日本への入国は難しい時期が多く、新学期の入居者は少数であった。入居時期も不特定であったため、例年のような全体での対面オリエンテーションは今年度も実施が叶わなかったため、いつ入居しても適切な情報提供ができるよう、各宿舎オンデマンド型のオリエンテーションの充実化に取り組んだ。その後は、RA（レジデント・アシスタント）が入居者とメールやライングループを作成して日々の生活を支援できるよう体制を整えた。アドバイジング部門教員は、学生交流課、寄宿舍管理係と連携し、RAによる活動の支援を行った。

• NUPACE (Nagoya University Program for Academic Exchange) 対象オリエンテーション

春学期・秋学期ともに新規渡日が難しく、NUPACE生はオンラインによる受け入れとなったため、全学新入留学生オリエンテーション用に作成したナレーション付きスライド、資料を提供した。

• G30オリエンテーション

まだ渡日できていない学生が大多数であったが、G30新入生対象に実施されたオリエンテーションで、異文化適応や大学生活適応についての説明を行った。

【交流型オリエンテーション（ワークショップ）】

世界の言語や文化を学ぶワークショップを地域のボランティア講師および名古屋大学学生グループの協力のもと行う予定であったが、緊急事態宣言による授業や課外活動の制限、学外者の来学制限等により、臨機応変な対応が必要となった（本年報「事業報告」中の「留学生支援事業」を参照）。

【引越しオリエンテーション】

教育交流部門によって、オンラインで開催された。アドバイジング部門では、「引越しハンドブック」の各宿舎への配布を担当した。

（2）国際教育交流プログラム

【スモールワールド・コーヒーアワー】

スモールワールド・コーヒーアワー（以下、コーヒーアワー）は、学部や学年を越え、学生が出会い繋がることのできる場を提供することを目的として、2005年後期から始めたプログラムである。運営や企画に主体的に携わる学生メンバーたちによって支えられ、キャンパスにおいて気軽に交流できる場づくりを継続して行っている。

2021年度は、春学期2回、秋学期2回、計4回のコーヒーアワーを開催した。新型コロナウイルスの影響によって、春学期はオンラインイベントとなった。秋学期は、対面イベントとして、ボードゲーム、スポーツゲームを少人数で実施した。コロナ禍における対面活動の機会が減り、運営メンバーも減少傾向が見られるため、国際交流学生グループ（ヘルプデスク、名古屋大学生協留学生委員会 COFSA）の協力を得ながら開催した。

時期	テーマ	参加人数
2021年5月	Virtual Lunch Party (Spatial Chat)	約25名
2021年6月	ゲームナイト (Among us, ワードウルフ)	約25名
2021年11月	ボードゲーム大会	約25名
2021年12月	スポーツゲーム	約25名
		計 約100名

オンライン・コーヒーアワーの課題としては、イベントでの交流や対話が活発に行われるよう、学生メンバーたちがファシリテーターとなり、小グループでのコミュニケーションを促していたが、オンラインのイベントでは、継続的な学生間のネットワークが構築されにくいという課題が残った。イベント終了後に、オンラインミーティングツールを閉じてしまうと、それで参加者間の会話は終わってしまい、次に繋がる関係性が構築されるまでには至りにくい点である。対面での活動を実施していた際には、コーヒーアワーのイベントに参加した学生たちが、何回か参加した後に、学生メンバーと関係を築きながら、次第に学生メンバーとして関わっていくような過程があったが、そのようなケースはなかなか見られず、今後運営に携わりたい学生メンバー募集に苦悩している。来年度は、さらに対面活動の展開を広げていく予定である。

〈コーヒーアワー学生メンバーによる活動の振り返り・抜粋〉

- オンラインでも対面でも交流ができ、留学生の方と楽しい時間を過ごせました。来年度はもっと交流の機会を増やせるといいと思います。
- 感染症の影響で学生間の交流の機会が限られる中、オンラインだけでなく対面でも交流イベントを開催することができました。初対面の人も含めたメンバー皆で、何気ない話で盛り上がることのできる大変貴重な場になっているかと思います。来年度も多くのスタッフや参加者とお会いできることを楽しみにしています。
- コロナ禍においてもオンラインで国際交流をすることができ、とても楽しかったです。今年度はオンラインでの活動が中心になりましたが、来年度はもっと対面でのイベントをしてみたいと思いました。
- 今年はコーヒーアワーで初めての1年になりましたが、毎週行われているミーティング、メンバーの散歩会など楽しめました。最初はオンラインでも新しい人との出会いができて嬉しかったのですが、秋学期には対面でイベントが開催でき最高でした！

【プレゼンテーションアワー ～世界が広がる20秒～】

2021年7月、12月に、グローバルプレゼンテーション大会「プレゼンテーションアワー～世界が広がる20秒～」を開催した。本プログラムは、2014年度から継

続開催しており、学生のプレゼンテーション能力を高めること、アカデミックな交流の場を創出して、分野や国籍を超えた学生間のネットワークを構築することを目的としている。毎回、自ら発信したい学生たちが多く、登壇者が生き生きと発表している姿から、学内におけるオープンでアカデミックな交流の場の重要性が伺える。

今年度は、プレゼンテーションアワーの学生メンバーと名古屋大学留学生会（NUFSA）と連携しながら、

7月はハイブリッド開催、12月はオンライン開催を実施するため企画運営を進めていった。イベントでは、アイスブレイクのクイズを入れて、参加者の方々が場に馴染み、質問やディスカッションなどしやすい場づくりを工夫した。ハイブリッドやオンライン開催によって、参加者が国内外から集まることができ、また卒業生などにもプレゼンターや参加者として声をかけることができ、新たなメリットを発見することができた。

日程	プレゼンテーション	参加人数
第15回 Presentation Hour (2021年7月・ハイブリッド開催)	「方言って知ってるけ?」「ヤメテは性的同意とは限らない」「セックスワーカーの人権」「β-アミノ酸-N-カルボン酸無水物の迅速かつ温和なワンフロー合成」	約20名
第16回 Presentation Hour (2021年12月・オンライン開催)	「自分なりの日本での就活」「日本での就職活動体験談」「ドイツ企業での研究開発インターン」「ドイツで博士号取ってみるのも良いんじゃない?」	約30名

本プログラムは、発表者が自分の研究、興味、活動等発信し、聴衆者が発表を聞くことによって、視野や世界観を広げていくことを目的にしているが、それと同時に、企画・運営を進める実行委員の学生メンバーがコーディネーションやリーダーシップ能力を高める場としての教育的な機能を持っており、関わる多くの学生たちが能力を発揮し、自己成長を促す契機を提供している。来年度は対面での活動も可能となり、より多くの学生が運営メンバーや発表者として関われる機会が作れることを願う。

〈プレゼンテーションアワー学生メンバーによる活動の振り返り・抜粋〉

- 他のメンバーと協力しながら、発表者にとっても参加者にとっても、できるだけ自由で安全な空間作りを心がけています！
- コロナ禍でなかなか対面開催ができず、難しいこともありましたが、誰でも自己発信ができ、多言語に触れられるこのイベントがこれからも続いていくと嬉しいです！
- コロナの影響で人々と交流や発信する機会が減っていた中、オンラインではありますがそういった場を少しでも設けられたのは有意義だったのではと感じました。自由で楽しく時には勉強にもなる、プレゼンアワーが大好きです！
- プレゼンターの方々がアイデアを発信しやすく、

運営も参加者も積極的に参加できる素敵な空間づくりを心がけています。皆の働きかけのおかげで、さまざまなバックグラウンドを持った方の考えに、本当に毎回たくさんの刺激を受けています。状況に合わせた開催方法で、無理せず、楽しく、今後とも継続していきたいです。

【グローバル・カフェ】

長期休みの間は、授業が開講されていないため人との繋がりを築くことができず、寂しさや孤独感を感じている学生が多いというニーズがあり、2021年9月に5回(1回1時間)、気軽に話せるようなオンラインカフェプログラムを実施した。オンラインツール Zoomのブレイクアウトルーム機能を用いて、参加者を日本語と英語の希望言語別に小グループを作り、対話が生まれるよう運営した。学生ファシリテーター、アドバイジング部門スタッフの協力を得て、おはなしすごろく、会話しやすいテーマが描かれているトーキングカード等を用いて、ディスカッションを促した。渡日を待っている留学生、夏休みの間に日本語や英語を練習したい学生、気軽に他の人とのコミュニケーションを取る機会を作りたい学生などから好評であった。本事業は国際機構事業費を得て、実施が可能となった。

【にほんご・カフェ】

2022年3月の春休みの期間には、日本語を用いて交

流したい学生を対象に、4回（1回1時間半）のオンラインカフェプログラムを実施した。日本語教育に携わっている古賀恵美氏にアドバイザーとして関わっていただき、プログラム全体の設計や運営を日本語教育の観点からも検討した。学生ファシリテーター3名、アドバイザー部門スタッフの協力を得て、おはなしすごろく、TAKOトーク等の形式を用いて、参加者がリラックスして会話を発展させていけるよう促した。渡日を待っている留学生、日本語を練習したい留学生、気軽に日本語で交流したい学生など、多くの学生に好評であった。プログラムの参加を通して、知り合った他の学生とSNSなどで繋がっていききたいというニーズもあり、最後に連絡先を交換できるような時間を作ったが、オンラインプログラムにおける学生同士のネットワーク構築のための工夫の必要性を認識した。本事業は国際機構事業費を得て、開催が可能となった。

【グローバルスチューデント・アンバサダープログラム】

2021年秋学期に、学内における国際交流や共修活動の機会を創出するために、グローバルスチューデント・アンバサダープログラムを実施した。外国人留学生と一般学生が協働で、コロナ禍において学生が交流や共修の機会に参加できるよう学生アンバサダーチームを形成し、プログラムを運営した。アンバサダーとなった学生たちは、プログラム企画運営に必要となる全体オンライン研修（名古屋大学における国際化、多様性、異文化コミュニケーション等）を受講し、チームに分かれ、定期的なオンライン・ミーティング（毎週1回）に参加し、オンラインイベントを実施した（オンライン・ゲームナイト、オンライン言語・文化ワークショップ、オンラインおしゃべり会等）。当初は20名近い学生がアンバサダー活動に携わったが、最終的には12名が継続し修了した。

本プログラムの一番の成果は、渡日できていない留学生たちがグローバルスチューデント・アンバサダーとして応募し、プログラムに運営に参加し、名古屋近郊に居住している学生たちと協働でオンラインによる技術を駆使しながら、課外活動に参加できたことが大きい。渡日できていない留学生の多くは、授業はオンラインにより受講できているが、課外活動に主体的に関わることのできる機会は少なく、大学内における学生のネットワークを構築する機会も少ないと推測され

る。そのような状況下の学生たちが、オンラインを通して、他学生と名古屋大学の国際化について検討し、アンバサダーの活動によりリーダーシップを発揮し、名古屋大学に貢献する機会に関われたことは、コロナ禍における留学生支援の観点から、成果を出せたのではないかと考えられる。

さらに、グローバルスチューデント・アンバサダーが提供した対面とオンラインの交流・共修イベントにより、多くの留学生が日本人学生を含め他学生と交流し、名古屋大学に対する理解、また多文化理解などの機会を深め、コロナ禍における孤独感や日常のストレスなどを低減し、名古屋大学の一員として所属意識を高めながら、学生生活を送れることにつながられたことは、重要な教育成果として捉えられる。

【Inspire Together：自分のビジョンについて考えてみよう！】

グローバルスチューデント・アンバサダープログラムの一部として、2022年3月11日、14日に、Inspire Together セミナーを開催した。一橋大学阿部仁氏を講師に招き、コロナ禍において、多くの留学生が渡日することが難しい状況を経験し、名古屋近郊に在住することができていても、人とネットワークを構築することが難しく、将来の可能性やビジョンを描きにくい学生生活を送っている中で、自分自身が大事にしていきたいこと、在り方、ビジョンについて探求するオンライン研修を開催した。オンライン上での自己紹介、レクチャー、ワーク、対話、共有などの機会を通じて、参加学生一人一人が丁寧に、自分自身の強みに気づき、将来へのビジョンが持てるような内容を提供した。

参加学生からは「写真などを使ったコラージュを通して、自己分析の機会となった」、「コラージュのアートギャラリーなどの機会を通して、感覚的な部分を表現でき、自分自身の在り方について言語化できる機会となった」「自分自身の在り方をと捉える際に doing だけでなく、being の視点も大切だということが理解できた」などの感想があった。渡日を待っている留学生たちも海外から参加し、留学生活や今後の名古屋での生活を始める前に有意義な機会となったのではないかと考えられる。

【アクションラーニング・プログラム】

多文化間コミュニケーション力を高める機会として、アクションラーニング（質問力を活用したコミュニケーション能力開発の手法）を用いたオンラインプログラムを2022年3月に3回実施した。アクションラーニング・コーチ（川平英里氏）を講師として依頼し、オンライン研修を3回実施した。アクションラーニングのプログラムでは、学生が探求したいテーマや課題についてチーム全体で質問を通して検討する機会となり、参加した学生間でコミュニケーション能力を高め、視野を広げる機会とつながった。特に渡日を待つ留学生たちが、実際に名古屋大学での学生生活を始めるにあたっての不安などを共有し、参加者で多角的に検討する機会なども生まれた。本事業は国際機構事業費を得て、実施が可能となった。

【名古屋大学グローバルネットワーク(国際交流グループ) 活動報告】

名古屋大学グローバルネットワークとは、国際教育交流センターが顧問や支援する国際交流グループの連携を促すことを目的に2009年から存在している学内ネットワークである。現在、5グループ(スモールワールド・コーヒーアワー、プレゼンテーションアワー、ヘルプデスク、異文化交流サークル ACE、名古屋大学留学生会 NUFSA) が共同で活動報告書を作成している。

2021年度は、NUPACE オフィスが中心となり、各グループに所属する学生と担当教職員と共同で年間活動の報告書を発行した。報告書は、アドバイジング部門のホームページを参照されたい。(https://acs.iee.nagoya-u.ac.jp/program/introduction.html) 活動報告の他に、合同でメンバー募集説明会なども実施しており、今年度はオンラインで開催した。

【学生組織との連携】

・異文化交流サークル ACE:異文化交流サークル ACE (Action group for Cross-cultural Exchange)は、様々なプログラムで名古屋大学に在学する留学生の生活のサポートや、留学生と一般学生の交流を促進するためのイベントの企画・運営を行う学生団体である。アドバイジング部門の教員が顧問を担当し、学生主体の活動状況を見守りながら、必要に応じて活動に対する助言、企画するイベントが多く、多くの学生に周知されるよう情報提供に協力している。2021年度は、コロナ禍における

状況の中で、日本語の会話練習を目的としたオンラインによる ACE LINK 活動（言語パートナー）をはじめ、屋外での活動など、多岐に渡るオンラインと対面活動を実施した。学生によるクリエイティビティと感性を活かして、名古屋近郊に在住する在学生在が海外にいる留学生とつながることができる場づくりなど展開した。

・名古屋大学留学生会 (NUFSA) : NUFSA では、異文化交流サークル ACE と連携しながら、留学生のためのバザーやウェルカムパーティーを毎年2回実施しているが、2021年度は新型コロナの影響により開催が叶わなかった。毎週 NUFSA メンバー間で、オンラインや屋外でのミーティングを重ね、オンラインによる新入留学生への歓迎ガイダンス、学生が自分の才能を表現し発揮できるようなオンラインイベント（写真コンテスト、エッセイコンテスト、タレントショー）、オンラインメンタルヘルス予防質問会、オンラインカラオケイベント、オンライン言語プログラム、対面による宝探しイベント、文化交流スポーツイベント、クリスマスコンサート等を積極的に企画を進め、国内外にいる在学中の留学生たちのサポート、そして交流機会の創出に尽力した。

・愛知留学生会後援会：1960年代に設立した任意団体で、60年以上にわたって愛知留学生会と連携して支援活動を行っており、2017年度からは、不測の病気や事故で経済的困難に陥った留学生のための緊急援助事業に限定して、後援会独自で活動している。緊急援助金の申請受付や、審査および支給や会計等を2012年度から田中が担当し、2021年度は合計8件の申請に対して援助金を支給した。

・名古屋大学中国留学生学友会：留学生の渡日も少なく、アドバイジング部門と連携しての活動はなかった。

・名古屋大学イスラム文化会 (ICANU) : 感染予防のための学生の来学基準と大学施設の利用基準に沿って、毎週金曜日に行なう集団礼拝の開催可否を決めた。文化交流イベントは昨年引き続き、行うことができなかった。アドバイジング部門で留学生支援経費を申請し、インターナショナルレジデンス東山の地下会議室

や和室の整備を行ったが、その一環として、金曜礼拝で使える手足用洗い場を設置することができた。

- ・名古屋大学アフリカ学生会（2017年度設立）：全学同窓会からの助成金を得て2020年度に予定していた2回の文化・学術イベントは延期となったまま、2021年度も開催できず、助成金は繰り越すことになった。
- ・名古屋大学韓国学生会：2021年度も連携活動はなかったが、役員の交替について連絡をもらった。
- ・名古屋大学台湾留学生会：2020年度から新入留学生用のオリエンテーション資料に情報を掲載しているが、連携活動はなかった。
- ・東海地域インドネシア留学生会：2022年度に大規模な学会を行う企画があり、アドバイジング部門からは助成金情報を提供した。

（3）学生個別教育（相談）および診療

相談室での相談活動を「個別教育」と位置づけ、名古屋大学の留学生を主な対象としつつ、在学生や教職員、他大学へ進学した学生、地域構成員などの相談にも可能な限り対応した。また、保健管理室において、精神科医による投薬を伴う精神科診療も行った。相談対応は原則予約制としたが、予約のない場合でも可能

な範囲で適宜相談に対応した。

【相談件数】

2021年度の相談総件数は、図1の通りである。参考までに2019、2020年度の件数も示している。直接の面談による相談に加え、電話やメールによる相談も、対応におよそ30分以上かかったものは件数に含めている。2019年度（1739件）から2020年度（1576件）では、コロナ禍によって来日できないなどの理由のために在籍する留学生数が減少したため、相談件数の減少がみられていたが、2021年度（1625件）は、2020年度に比べて、相談件数はやや増加している。2021年度は新型コロナウイルスの水際対策が緩和されて、外国人が入国可能な時期があったためと考えられる。相談に訪れた合計人数は394人（日本人学生や教職員など含む）で、留学生人数は255人であった。2021年11月1日時点では、名古屋大学には2044人の留学生が在籍しており、この人数を母数と仮定すると、在籍留学生のおよそ12.5%、すなわち8人に1人が当部門へ相談に訪れていることとなる。

日本に入国できない学生からの相談、もしくは新型コロナウイルス感染対策のため、オンラインによる相談も実施しており、全体相談件数のおよそ15%がオンラインで実施された。また、相談における使用言語は、英語が全体の52%であった。

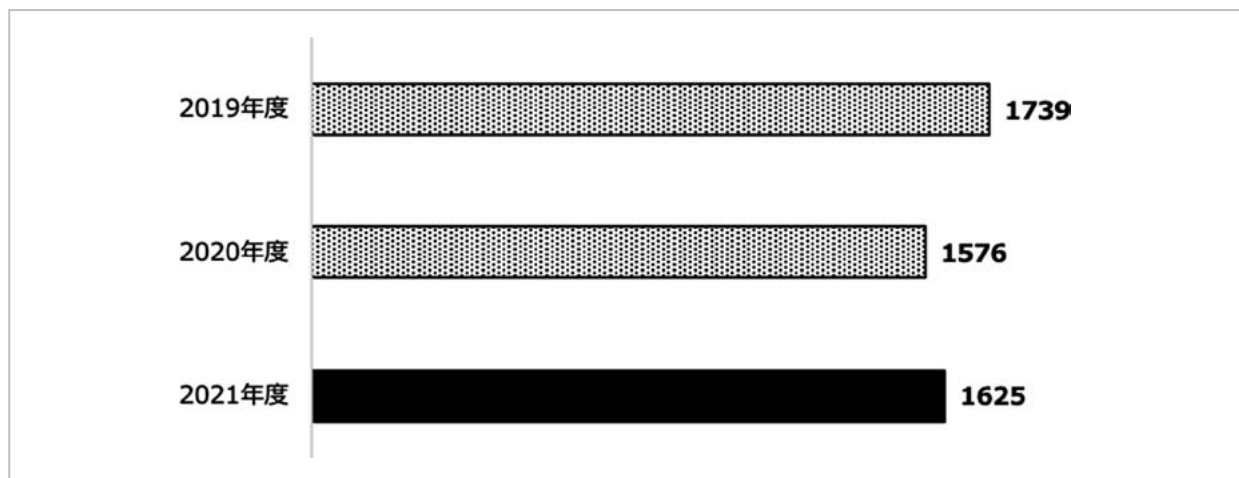


図1 年度別相談総件数

2020年度および2021年度の相談内容別の件数を図2に示す。一度の相談における内容が複数にまたがって

いる場合も少なくないが、その場合は主たる相談内容を選択している。2021年度は「心身不調・メンタル」

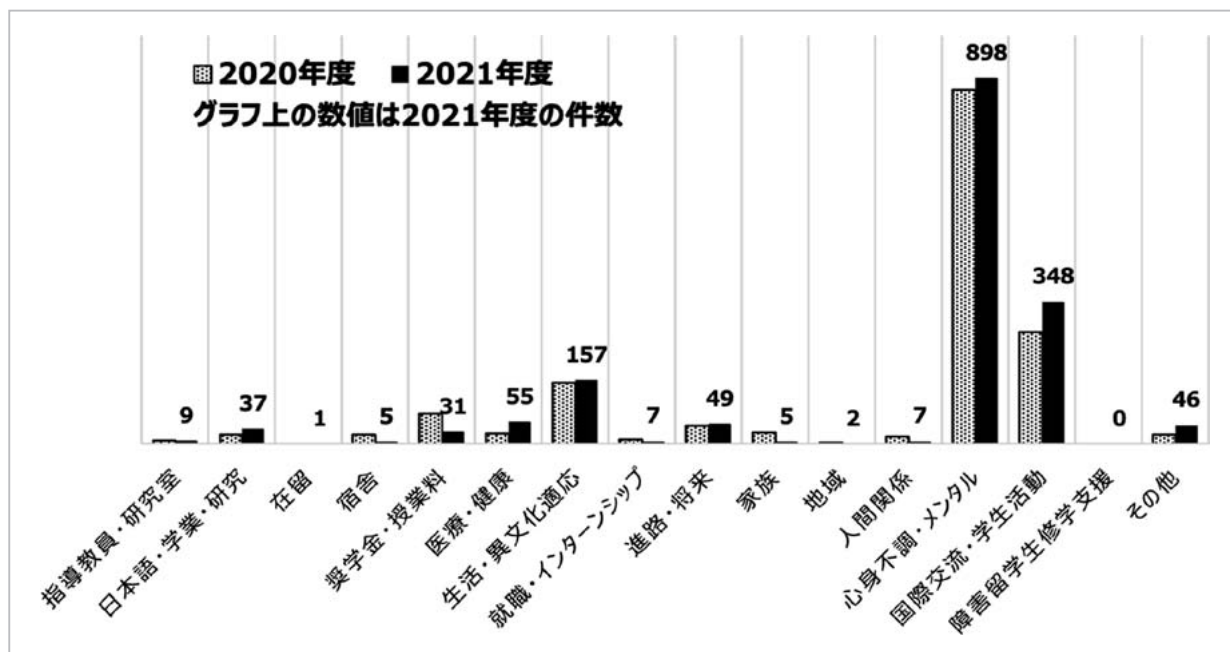


図2 相談内容別件数

898件、「国際交流・学生活動」348件、「生活・異文化適応」157件の順に件数が多い。この傾向は2020年度と同様である。「心身不調・メンタル」は全相談のおよそ55%と、半数以上を占めている。

2020年度および2021年度の学年・所属別の相談件数を図3-1に示す。2021年度は、2020年度に比べて博士後期課程の相談件数が増え(459件→485件)、博士前期課

程の相談件数は減少した(328件→254件)。また例年、博士課程においては前期・後期ともに年次が上がるにつれて相談件数が増加する傾向がみられるが、2021年度において、博士前期課程では同様の傾向がみられたが、博士後期課程では年次による件数はあまり差がなかった。

図3-2では所属区分別在籍留学生一人当たりの相談

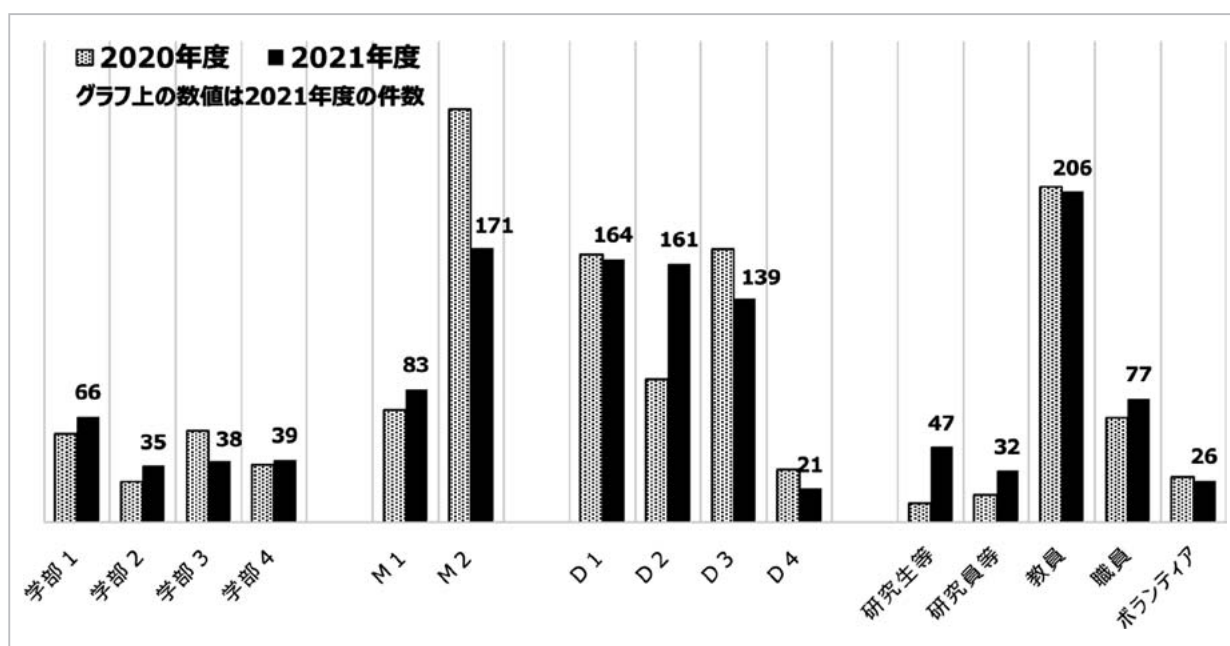


図3-1 学年・所属別相談件数

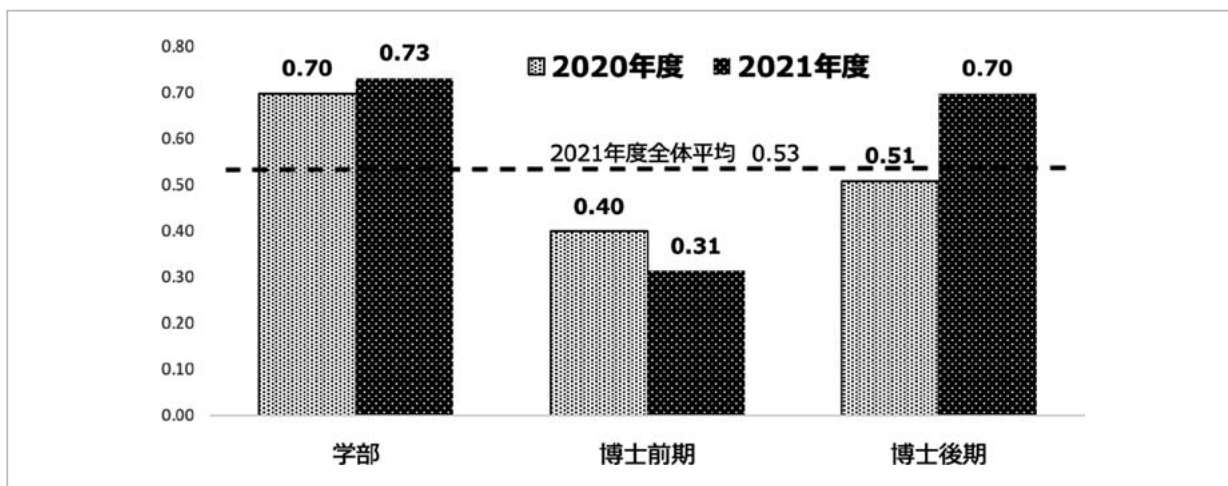


図3-2 所属区分別 在籍留学生一人あたり相談件数

件数を示している。所属別に在籍している留学生数(2021年11月1日時点)で2021年度の相談件数を割ることで算出しており、学部学生：博士前期課程：博士後期課程=0.73：0.31：0.70となっている(図3-2)。2020年度と比較して、2021年度においては、博士後期課程の在籍留学生一人当たりの相談件数に著しい増加がみられた。

図4-1には、2020年度および2021年度の部局別の相談件数を示す。2019年度、2020年度に著しい増加がみ

られた経済学部／経済学研究科の相談件数は、2021年度は減少がみられた。他の学部・研究科においては、顕著な増減はみられなかった。NUPACE生は、新型コロナウイルスの水際対策によって来日が叶わなかったため、相談もなかった。

図4-2に、部局別の在籍留学生一人当たりの相談件数を示す。各部局の相談件数を、該当年度の11月1日時点での各部局在籍留学生数で割ったものである。2021年度は、経済学部／経済学研究科、文学部／人文

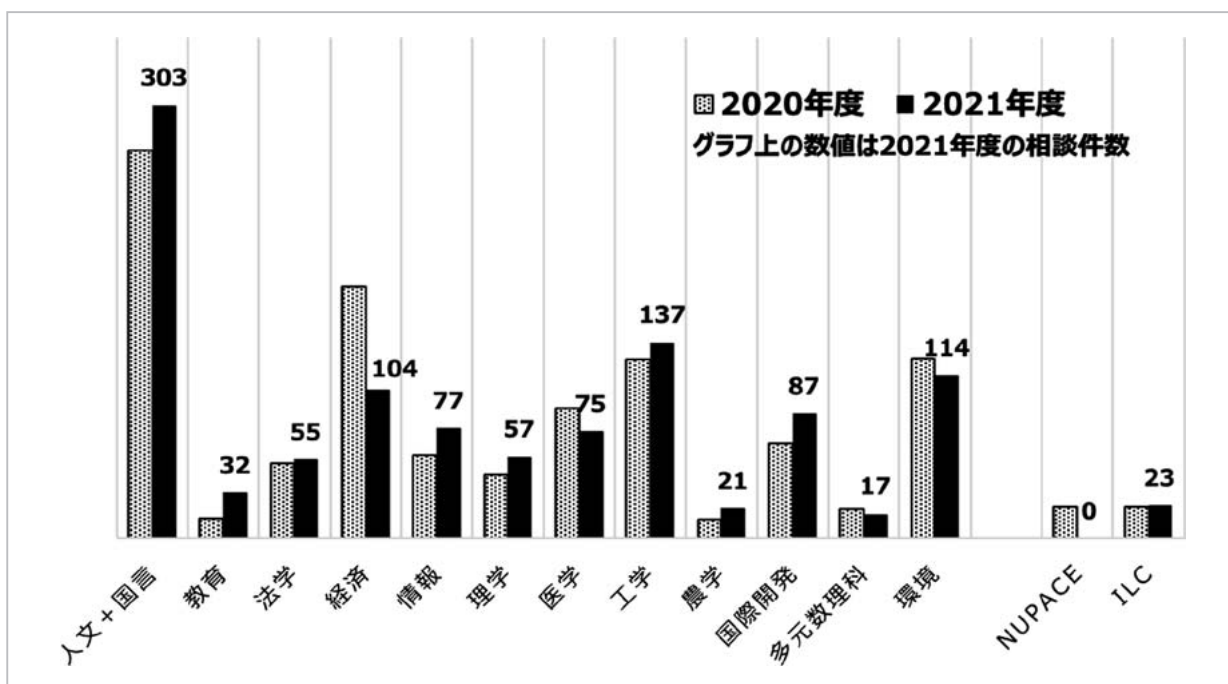


図4-1 部局別相談件数

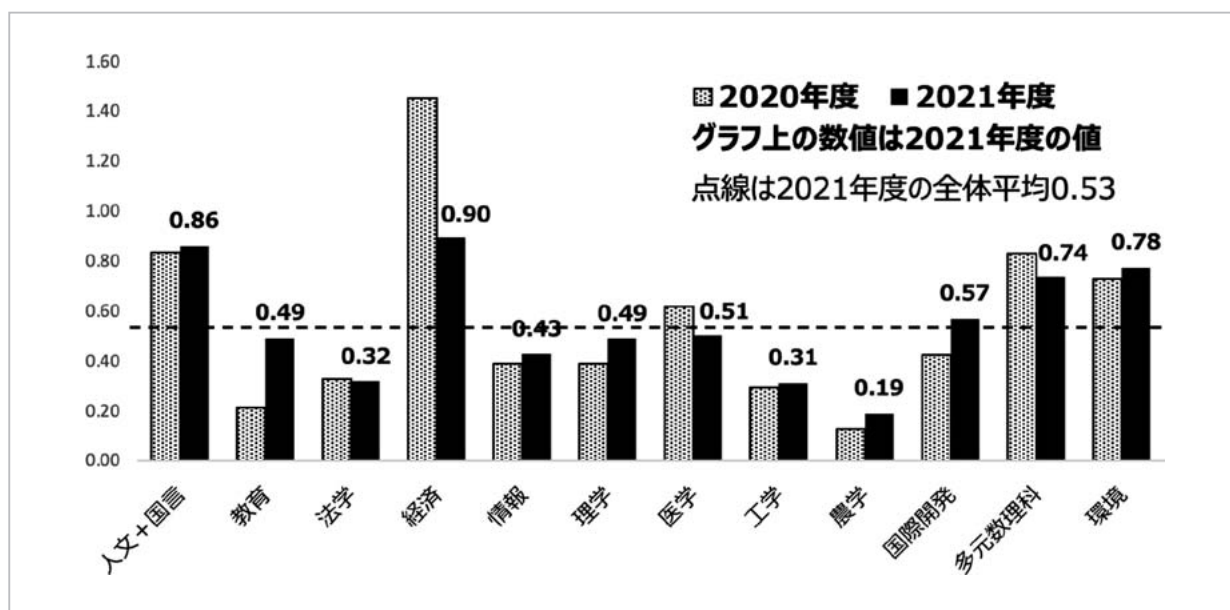


図4-2 部局別 在籍留学生一人あたり相談件数

学研究科+国際言語文化センター、環境学研究科、多元数理研究科が全体平均より、部局別の一人あたり相談件数の値が高かった。

【相談内容】

様々な相談の詳細やその背景については、相談者のプライバシー保護の観点から、報告することができない例が多いが、今年度の特徴として以下を報告し、今後の活動に活かしていきたい。

■指導教員・研究室

研究室での人間関係について、疑問や悩みが寄せられた。所属部局の国際化推進教員や学内外関連機関と適宜協力しながら、疑問の払拭や問題の解決にあたった。ハラスメントに該当すると考えられた場合、所属部局と連携して支援に当たるケースもあった。また、留学生の指導教員等から学生対応について相談を受けることもあった。

学生へは、疑問に感じるものがあつたら問題化しないうちに相談できる場所があることを、オリエンテーションや日々の活動の中で周知し、教員たちとは、教員が自ずと持つ強い立場を理解し、学生に対する言動に自覚的になる必要性を共有している。

■日本語・学業・研究

指導の受け方についての相談、教員との面会約束の

取り方、論文指導の受け方等、出身国などで慣れて来た方法がそのまま通用しないこともあり、一緒に考えた。

■在留

在留については留学生の所属部局において相談に対応する環境ができているため、本部門への相談はなくなった。

■宿舍

今年度は、コロナ感染症の影響により、渡日留学生の入国が大幅に遅れるだけでなく、宿舍で2週間の自主待機期間を過ごす学生も多くいたため、関係部署や宿舍で留学生支援をするRAと相談・協力しながら対応した。

■奨学金・授業料

コロナ禍でアルバイトの減少傾向が続いていること、また紛争や戦争の影響を受ける学生がいることで、経済的困窮の相談は少なくない。生活再建の方策を一緒に考えることもあった。

■医療・健康

持病のため薬剤を継続する必要がある、日本国内での処方希望する留学生において、状況を確認し、学外医療機関宛の診療情報提供書を作成した。

交通事故の被害にあった留学生の保険金や後遺症の問題について、継続して保険会社との連絡や交渉に関わった。学外相談所等にも問い合わせながら慎重に進めたが、コロナ禍では学生の来学が難しくかったり、一緒に詳細に書類を見ることができなかつたり、また、一旦帰国した子どもが、コロナ禍再び日本に来ることができなくなるなどの事態もあった。2年以上かかって、ある程度納得のゆく形で交渉を終了することができたが、身体的にも精神的にも負担の大きい交通事故処理が、コロナ禍で複雑化した事例であった。

■生活・異文化適応

複数のアカデミック・パワーハラスメントの事案があり、解決をめざして対応した。

■進路

研究の方向性を変えるほうがよいか、継続して研究生生活を続けるべきか、休学や退学をしたほうがよいか、など進路に関する相談があった。就職の可能性についてはキャリアサポートセンターと連携して対応した。

■家族

家族と一緒に日本に滞在している留学生が一定数おり、配偶者や子供の日本での生活適応についての相談があった。その一方で、母国にいる家族のトラブルや健康問題等について不安を抱えて相談に来るケースも多く認められた。

■地域

地域交流はこれまで対面交流が中心であったため、2021年度は多くの交流事業が中止または延期となった。教育機関・公的機関からの依頼も、本学の課外活動基準に沿って判断し、部門として協力できないケースもあった(4.(1)参照)。

■心身不調・メンタル

精神的な不調により、入院治療を要する留学生において、部局の国際化推進教員と連携し、医療機関への連絡や調整を行った。また近隣の精神科医療機関は日本語でのみ診察対応をしているため、投薬による治療を要する英語話者の留学生のほとんどは学内保健管理室で診察・処方を行っている。

急速に精神状態が悪化し、精神科病院での入院治療を必要とする例があったが、新型コロナウイルスの水際対策のために家族が来日できず、関係する教職員の労力が非常に大きなものとなった。また、紛争や戦禍によって母国の状況が劣悪となり、ストレス反応が遅延するケースも複数あった。

■国際交流学生グループ

名古屋大学留学生会(NUFSA)、名古屋大学イスラム文化会(ICANU)、異文化交流サークル(ACE)の相談に対応しながら連携した。会が主催する行事についての相談、教室や運動施設利用にあたっての申請や連絡、コミュニケーションについてなどである。その他、名古屋大学で活躍している様々な国際交流活動グループからの相談に応じた。学生グループの活動を通して名古屋大学の国際化に貢献した学生たちを、国際教育交流センター長顕彰に推薦した。

■交流活動

2021年度は交流活動には引き続き大きな制約があったがオンラインによる交流や感染対策を徹底した対面の交流についての相談が寄せられた。学生支援課と相談しながら安全に交流活動が行えるように工夫した。

■障害学生修学支援

自閉症スペクトラム症や注意欠陥・多動性障害などの発達障害があり、留学する学生が増加してきている。医療面では、必要な治療が継続できるよう適宜学内外の医療機関を紹介するとともに、修学面では、アビリティ支援センターと連携しながら、必要な合理的配慮の提供などを検討した。

■その他

2021年度も引き続き、「留学生のための確定申告セミナー」を名古屋税理士会の協力の元、実施した。詳細は、事業報告「外国人留学生・教職員のための確定申告オンラインセミナー及び個別相談会」を参照。

(4) 授業

春学期に、G30教養科目、全学教養科目として「Exploration of Japan: From the Outside Looking Inside(留学生と日本)」をオンラインにて開講した(高木)。秋学期の全学教養科目「留学生と日本—異

文化を通しての日本理解」は国際機構教員チーム（浮葉，高木，和田）により，オンライン開講した。2021年度より，博士課程教育推進機構が開講している Professional Literacy の1コマ（多様性で活力を上げる）を高木・田中が担当し，大学院生の多様性に関する認識を高めることにつとめた。

また，総合保健体育科学センターと共同で，後期にG30教養科目「Health and Sports」（酒井）を担当し，不眠への対応などの精神衛生教育を行い，授業を通じて精神的不調の予防につとめた。さらに，2019年度より博士課程教育推進機構が開催する Professional Literacy の1コマ（Tuning up yourself）を引き続いて担当しており，博士課程学生へもメンタルヘルスの基礎知識の教授につとめた。受講者からの個別相談希望もあり，当部門との顔の見える関係性構築にも役立っている。

3. 大学国際化への貢献

(1) 民間留学生寮入居推薦者選考

留学生のために寮を提供している会社や団体が複数あり，入居希望者の書類選考を教育交流部門の教員や学生交流課の担当者とともにに行った。宿舎提供の趣旨や提供者の希望と申請者の条件が合致するよう，また，提供者には本学の学生の状況を理解いただけるよう，学生交流課を通してコミュニケーションをとりながら，選考にあたっている。

(2) 国際交流会館レジデント・アシスタントや関係部署との連携

名古屋大学では，毎学期約600名の新規渡日留学生が国際交流会館に滞在している（インターナショナルレジデンス東山/山手/妙見/大幸）。今年度も昨年度に続き，COVID-19の影響により，例年通りの研修や宿舎での行事を行うことができない一年となった。宿舎に入居する留学生数も少なく，多くの活動ができない一年であったものの，この期間に，オンラインオリエンテーションの充実化を図ったり，SNSやメールを利用した情報提供の方法を構築したり，新しい形での留学生支援の形を模索した一年であったとも言える。オンラインでの情報提供が充実したことにより，これまで途中入居の学生に十分な情報提供ができないという課題があったが，その問題点は解消されるという副次

的な効果があった。

宿舎でのコロナ感染症予防対策については，関係部署と協力して対応した。今年度も，共有スペースを閉鎖したり，机や椅子の数を減らしたりと，宿舎内の交流機会を制限しなければいけない時期が長く続いた。宿舎でコロナ感染症の発生があった際には，RAの協力を得て，情報提供や居住者の体調についての情報収集を行った。感染者や濃厚接触に対しては，保健管理室の指示の下，宿舎関係者とRAと協力して隔離期間の支援を行い，宿舎での感染広がりを防ぐことができた。加えて，留学生支援事業にも採択された「国際交流会館での防災教育」の一環として，名古屋大学災害対策室の専門家の協力を得て，RA対象の防災研修を実施した。RAたちに防災の基礎知識を学んでもらうとともに，建物設備や非常時の対応に関して情報提供を行なった。

国際交流会館での活動は，多くの関係者が関わっており，課題も多岐にわたる。関係者間での迅速な情報共有や，共有認識の確認等は引き続き解消すべき課題となっており，早急に連携体制の改善や，情報フローの見直しが望まれる。今後も宿舎での充実した支援と，有意義なRA活動実践のため，宿舎の意義やRAの役割について再検討し，大学として宿舎生活の質を上げるための問題への取り組みが必要である。

(3) 部活・サークル活動国際化

2019～2020年度の2年間の部活・サークル実態調査の結果，留学生側への圧倒的な情報不足や部活・サークル団体側の留学生に対する認知が低いことが明らかとなったため，団体，意見交換会（対面/オンライン）を経て，部活・サークル基礎情報の案内として日英併記リーフレットを作成した。リーフレットは，本学の部活・サークルの基礎情報をはじめ，一部団体から提供を受けた活動写真やコメントの紹介，情報源となる既存の学内リソースを案内するシンプルなものとし，新入留学生オリエンテーション資料に追加して掲載した。国内学生が入学時に得る情報を，新入留学生にもわかりやすい形で届けられるよう配慮した。今後は，学生たちとの連携を継続・強化し，学生が主体となって情報更新をしたり情報提供の場の構築をしたりできるよう，現状にあったサポートを続けていきたい。本調査に関する詳細は，事業報告「名古屋大学部活・サークル実態調査：国際化に向けた土台作り」を参照

されたい。

4. 地域社会と留学生の交流への貢献

(1) 国際理解教育への留学生募集の広報協力

地域組織等が主催する行事への留学生参加募集の後援・広報協力について、問い合わせが数件あり、コロナ禍で対面活動は中止や延期となった。非対面活動は2件実施され、留学生が参加した。

明和高等学校より依頼のあった「明和グローバルサイエンス交流会（代替事業）」には3名の留学生が参加した。高校生の課題研究ポスター発表の動画を視聴し、研究に対するアドバイスやコメントを返送するという企画であった。旭丘高等学校より依頼のあった3泊4日の宿泊合宿「高山グローバル・サマー・フェスタ（リーダー募集）」は中止となったが、オンラインにて「高山グローバル・サマー・フェスタ winter」を延べ4日間実施し、3名の留学生が参加した。海陽学園より依頼のあった「海陽学園 異文化交流会」はまん延防止等重点措置対象期間のため延期となった。

地域組織にとってはオンラインによる交流等、実施方法を模索する一年となり、留学生にとってもまた、地域貢献や地域における交流活動の機会が激減した一年となった。

(2) コロナ禍での地域一般家庭との交流

2021年度も昨年に引き続き、実際に家庭を訪問してのホームステイ・ホームビジット事業は実施できなかったため、春・秋学期に半年間限定で「文通プログラム」を実施し、アドバイジング部門に登録している地域国際交流団体の協力を得ることができた。また2021年8月と2022年2月に「オンラインホームビジット」をNUSTEP（名古屋大学短期日本語プログラム）の休日オプション行事として行った。地域のHippo Family Clubに受け入れ協力を依頼して、学生と当クラブの会員家庭が交流した。文通もオンラインホームビジットもそれぞれ、留学生と地域の人々を繋ぐ価値ある活動となった。

さらに、アドバイジング部門に登録しているホストファミリーには「地球家族プログラム便り」を作成して送付し、今後も連携していけるようにした。（詳細については本年報、事業報告編の「地球家族プログラム」を参照）

(3) 地域連絡会・留学生のためのバザー

2021年度は、名古屋大学留学生会（NUFSA）、異文化交流サークルACE、YWCA、ともだち会、地域のボランティアの方々と30年以上継続して実施してきた「留学生のためのバザー」は開催できなかった。来年度は渡日が可能となる留学生が増える予定のため、大学の基準に基づき、対面でのバザー開催を検討していく。

(4) 警察との連携

千種警察署や愛知県警察本部とはこれまでと同様、地域の安全や留学生たちへの的確な情報提供のために連携し、警察からアドバイスを受けた。

5. 研究・研修

(1) 著書・論文・報告

- 藤井基貴，太田知彩，高木ひとみ，星野晶成「コロナ禍における国際教育交流分野の人事公募に関する調査研究」第18号，静岡大学大学教育センター，2022年
- 酒井崇（分担執筆）『発達障害の精神病理Ⅲ』星和書店，2021年

(2) 学会活動

- 国立大学法人留学生指導研究協議会（COISAN）監事（田中）
- 国立大学法人留学生指導研究協議会（COISAN）編集委員（和田）

(3) 研究活動・FD/SD 活動

〈発表・講師等〉

- 2021年7月5日 2021年度 国立大学法人留学生センター等 留学生指導担当研究協議会分科会ファシリテーター（田中）
- 2021年10月16日 BRIDGE Institute ワークショップ「環境変化による逆境とチャンス：課題に能動的に取り組む学生たちとともに考える」（高木，他）
- 2021年11月19日～21日 第117回日本精神神経学会 学術総会 シンポジウム「COVID-19感染拡大長期化における学びと育てのメンタルヘルス」シンポジスト（招待），（酒井）
- 2021年11月20日 国際教育研究コンソーシアム夏季

大会「内なる多様性に気づき慈しむ体験型ワークショップ」(平井・高木)

- 2021年12月24日 愛知県留学生交流推進協議会講演「コロナ禍における留学生の精神的不調からみえること」(酒井)
- 2022年2月10日 2021年度国立大学法人留学生指導研究協議会 兼 第54回大阪大学留学生教育・支援協議会分科会ファシリテーター (田中)

〈主催〉

- 2022年2月9日「外国人留学生・教職員のための確定申告オンラインセミナー」講師：名古屋税理士会 税理士 竹中啓倫, 河村正
- 2022年2月15日, 22日「オンライン防災セミナー&ワークショップ」講師：椿佳代

〈参加〉(主なもの)

- 2021年10月22日～23日 日本精神病理学会第43回大会オンライン参加 (酒井・和田)
- 海外文献抄読会参加 (2021年11月) (酒井, 和田)
- 2022年3月6日 JAFSA 多文化間メンタルヘルス研究会オンライン参加・報告書執筆 (田中)
- 2022年3月26日～27日 精神病理コロク2021/22 (酒井・和田)
- 東山症例検討会 (保健管理室, 毎月開催)
- 東山グループスーパービジョン(ケース検討) (毎月第2月曜日)

(4) 研究助成

- 日本学術振興会科学研究費補助金 国際共同研究強化(B)「日本メキシコ双方向の長期的留学成果～政府文化外交50年の分析」2018年10月～2023年3月 (研究代表者：田中)
- 日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C)「ハラスメント問題に対応するソーシャルワーカー養成のための集学的研究」(研究代表者：山形大学 中澤

未美子, 研究分担者：和田)

- 日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(B)「大学の国際化を担う専門教職員の養成メカニズムに関する国際比較研究」2020年4月～2024年3月 (研究代表者：高木)
- 日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(B)「ブレンデッド・ラーニングによるグローバル人材育成の理論的・実践的研究」2021年4月～2026年3月 (研究代表者：立命館大学 堀江未来, 研究分担者：高木)

6. 社会連携

国際交流関係財団等の委員

- 愛知県国際交流協会 評議員 (田中)
- 大幸財団 奨学金選考委員 (田中)
- 愛知留学生会後援会 常任理事, 緊急援助金担当 (田中)

7. おわりに

2021年度も、世界的なコロナ感染の状況や、日本政府・外国政府・地方自治体・大学の方針を注視しつつ、昨年度整備したIT環境を駆使しながら臨機応変に仕事をすべく努力した。国際学生たちの研究と生活を支え、彼らが目的を達成できるよう、尽力していく所存である。勿論、スタッフ自身の心身の健康保持・増進にも努める必要がある。

2022年度には、国際関係組織の改編が予定されており、アドバイジング部門はさらなる組織変化を経験することになる。2013年の国際教育交流センター設立時から考えると、兼務する学生支援センターの改組も含めて6回目の組織変化である。学生へのマイナスの影響は最小限にすべく工夫をしているが、事務作業を始め多くの調整が必要で、現場の苦労は計り知れない。